展覧会　点描

新里義和「カイ」展（18日～12月7日、画廊匠）　那覇工業高校に勤める新里さんの県内では初の個展。画廊の地の部分に摩滅したサンゴ石灰岩を配置。壁面には、厚さ五センチ大に輪切りにされた原木に薄く和紙を張り着色した木々が並び、長方形の黒い布がたれ下がる。加えて糸や和紙でたばねられたかれ枝が壁にたてかけられ、宙づりされる。それぞれの素材感を生かしながら、インスタレーション的手法で空間を構成している＝写真。

アンギ

屋敷内はがらくたの山

輪切りにして色を塗った木材を壁に、流木と石灰岩を床にそれぞれ展示し、全体で〝浜辺の状況〟を表現しているのが、那覇工業高校教諭、新里義和さん＝写真＝の個展（18～12月7日、画廊・匠＝宜野湾市大山）。ドアを開けて入った瞬間、「随分散らかしてあるなあ」という印象を受ける。

このように空間の中でバランス的な広がりを持たせ、ものにはこだわらずに場面設定をする表現方法を〝インスタレーション〟（設置の意）という。東京の若い世代にもこの表現方法が出て来ている。記録は写真でしか残せない。

「創作の手順としては散策の感じで浜辺に行き、その雰囲気を頭に入れておく。そして、必要な材料を集め、持ち帰る。貝は輪切りにした木材、流線形に形づくった板で表現します。そして、浜辺を芸術的に再現する。いろいろな素材を使っているが、自分の意識の中では絵の具と変わらない。理屈っぽく考えず、素直に表現しているつもりです」

琉大美工科時代の恩師・永津禎三さんは「都市でインスタレーションをやっている人の作品を見ると、上すべりの感じがするが、新里君の場合は聖域（御嶽）のイメージが強い。その辺が魅力です」と説明する。

新里さんは浜辺に通っては材料を拾ってくるため、屋敷内はがらくたの山。理解を示していた家族も最近では悲鳴をあげている。